



Title	晩年の宗因：宗因伝記研究をめぐる覚書
Author(s)	尾崎, 千佳
Citation	語文. 1998, 71, p. 11-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68934
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

晩年の宗因

——宗因伝記研究をめぐる覚書——

一

西山宗因はその晩年、当代の俳風放埒に走るを嘆いて俳諧から遠ざかり、連歌の世界に再び強い関心を寄せるようになった——このような定説を、いま仮に「宗因連歌回帰説」とでも呼ぶことにしてここに取り上げるのは、当説の持つ、存外に大きな影響力の故である。晩年に至って俳諧に倦いたのであれば当然、俳諧に親しく傾斜した時代がそれ以前に存在していなければならぬ。ではそれはいつごろからか。伝記研究は常に、連歌と俳諧の間で揺れ動く宗因像を追いかけるを得なくなる。野間光辰氏執筆・明治書院版『俳諧大辞典』「宗因」項にある以下の件は、そのような宗因像理解から記されたものであろうし、乾裕幸氏による角川書店版『俳文学大辞典』も概ねこれを踏襲、「連歌の時代」「俳諧の時代」の二部構成で宗因伝を祖述する。

……敢て新奇を誇るの余り、門流の風体はいよいよ出でて乱雑放縱に走るに至った。しかも、それらに対する激しい非難がごとごとく宗因の一身に集中されるのである。宗因はようやく俳

尾崎 千佳

諧に倦いた。世上の俳風異体なることを嘆じて、老人には無用であると語りもし、また手紙にも書いている。延宝八年の作「なんにもはや楊梅の実むかし口」の一句は、そうした宗因の心境を吐露した作で、延宝九年正月十日付藤波修理宛の書簡に、「誹歳旦は不仕候、当風あわぬ事、無用に存候」といい、同年六月某日隠居所増築を報じた書簡に「連歌おもしろく成申候、誹は当風成まじくおぼえ候」と記している。

当説は、談林俳諧の命運をも左右する。宗因の俳壇登場に始発し、その俳諧熱の冷却に伴って失速、死没を機に実質的終息を迎える談林俳諧史にとつては、宗因の内部における連俳の比重という極めて個人的な問題が、抜きがたい指標とされるのである。長きに亘るが、今栄蔵氏「談林俳諧史」(明治書院「俳句講座」第1巻、昭34)から、談林俳諧敗退を招いた、宗因の意識の所在に関する部分を抜粋しておこう。

……「そうよそよ」の句(稿者註・阿蘭陀丸二番船「巻頭発句」は、「宇津不之曾女」^{元禄十七年}の西吟の記録によれば、彼が延宝八年正月宗因に年始に行った時、「世上誹諧異跡なる事を噂たまひ」

たる俳句の作であつたという。噂とは非難を含めてのことに外ならなかつたであろう。それは他の記録によつても推測に難くない。『梅翁宗因発句集』所収の「当世の風鉢年々日々ところどころにうつりかはる。新しく珍らしくかなはぬ老の耳にだにおもしろくうらやましながら、初学のいづれをよしとおもひさだむるかたくなやとおぼえて、今つくばや鎌倉宗鑑が犬ざくら」なる句調には、目まぐるしく変貌してゆく異様な俳風に悲嘆する心がある。これについては惟中也次のような記録を残している（註・「続無名抄」引用、後掲のため省略）。

また、江戸の在色宛の手紙^{「解妙抄」}に、「誹の事も老衰益なき」と嘆いたのも、「なんにもはや楊梅^{所引}の実むかし口」^{「阿蘭陀丸」と}、急激に変貌する俳風の中で自虐的に嘲笑したのも、すべて同じ延宝八年のことであつたが、また京都の三井秋風の異鉢の激しさにあきれて「秋風が新しき口ぶり、三吟を見て我を折候^{宗因}と言つたのも、それから間もない頃のことであつた。かくしてこの変風時代の俳風に対する宗因の態度は極めて批判的であつたと共に、しかも「老衰益なき」として俳諧に対する熱意も漸次冷却してゆく方向を取つたようである。

晩年の宗因をめぐる如上の認識、すなわち△宗因連歌回帰説∨はしかし、宗因について何事かを述べようとする際、必ず言い添えられた情報ではなかつた。許六が「天満の天神月次連歌の宗匠なりしが、俳諧師と成、古風の俳諧扣やぶり、天地の間に独歩す」（『正徳五年跋・歴代滑稽伝』）と評し、才庵が「元は連歌の達人成しが、連歌を看破して誹師にはなれり」（『享保三年成・椎本先生語類』）と仰ぎ、曾孫昌林が「老の後誹諧をこのみて西翁・梅翁・野梅等の號有、又

忘吾齋と云」（『寛延三年写神宮文庫本・西山三籟集・奥』）と書き付けるとき、評伝の主眼は、連歌師から俳諧師への転身こそ注がれている。『綾錦』（沾涼編享保十七年刊）に「元連歌師」、「誹諧家譜」（丈石編宝暦元年刊）に「晩年連歌ヲ以テ誹諧ニ遷シ、東府ニ遊テ壇林一風ヲ興立ス」とあるのを見れば、「晩年の宗因」といへば俳諧師としての活躍を思い起こすが、むしろ一般であつたことが類推されてこよう。ならば、連歌回帰の説は何処に発するものなのか。

本稿は、△宗因連歌回帰説∨の発信源を探り、宗因伝記研究における私見提出に及ぶことを目的とする。前引二氏の所論に就きつつ整理するなら、本説に係わる宗因の発言は延宝八年以降に集約され、その依拠するところは決して豊富ではない。一つに世上の俳風悲嘆を込めて「なんにもはや」「今つくばや」の二句を吟じたこと、また一つに秋風の句作に触発されて「連歌おもしろく成申候」と告白する書簡のあることが、△宗因連歌回帰説∨の支柱と見られる。まずは、発句二句の検討から、問題を解きばぐしてゆくこととしたい。

二

「なんにもはや」「今つくばや」両句ともに、延宝八年八月跋『阿蘭陀丸二番船』に所収の、独吟百韻の発句。諸説両句を同年の作とするが、前者については、梅朝・江雲の脇起こし両吟歌仙一卷が備わつて、成立年次推定の助けとなる。延宝八年九月刊『通し馬』に拠れば、梅朝は同年の春江戸に向かい、九月中に帰坂したものらしい。彼地で江雲と巻いた当の歌仙一卷の立句となつた宗因の「なんにもはや」句は、してみると前年夏の吟に比定するのが妥当であらう。当該百韻の第三までを、『阿蘭陀丸二番船』より抜書してみる。

独吟

なんにもはや楊梅^{ヤマモ、サネ}の実むかし口

時に吹風吞^{フク}こんで夏

涼しいは分別ひとつ世中に

見ることく、前書の類はない。左掲の写真は、柿衛文庫蔵宗因自画賛だが、これもただ句を記すばかりであることに注意を払っておきたい。

西山梅翁

延宝七年の作にかかることになれば当然、その背後に控える俳壇情勢は、「目まぐるしく変貌してゆく」翌八年のそれとは微妙に異なつたものであつたはずである。また一体に、当句から「急激に変貌する俳風の中で自らの昔口を自虐的に嘲笑した」意まで読み取り得るのか、という疑いも起ろう。やまももの実に託して昔日を回顧する発句に、付句では翻つて現在を対比させた、それ以上の含みは少なくとも、ここにおいては窺えまい。

続いて「今つくばや」の吟。体裁は同前、『阿蘭陀丸二番船』に拠る限り、興行の経緯は知られない。

独吟

梅翁

今筑波^{イマツツバ}や鎌倉宗鑑が犬桜

蒙^{モウ}ひそかにきく哀猿^{アヱザル}の春

朧々たる夜月に弾ずる曲すんで

本句については、惟中からの発言を聞いておこう。今氏も挙げる延宝八年八月刊『続無名抄』巻中、「万葉無心所着の哥」の条。⁽³⁾

此比の世上の句鉢を梅翁もなげき給ひて發句に、

いま筑波かまくら宗鑑いぬさくら

と作せられぬ。太平記第一に、時政九代の後胤前相模守平の高時入道宗鑑が代に至つて、天地命をあらたむべき危機^{キギ}爰に顕れたり、と書たり。此宗鑑、数千の犬を庭上にはなちかみ合せし遊興、北条九代滅亡こゝに究れり。いまの俳風も、江戸・京・大坂、面々の流をたて、専に無心所著のみ好む事、山崎宗鑑よりいま此時に当つて俳諧乱迷の様様也。其故は、京・江戸・大坂の俳士、昨日の作今日は古しとし、春もてあそぶ風儀秋はもちひず、去年の格ことしはかはりぬ。これらを板行して国々へ

web公開に際し、画像は省略しました

下す。遠国波瀾のすゑにやゝもちひてかくもあらんかと、もと
しなれし風格を五句三句あらため、すこしもとづくうちにまた
異風の鉢をとり給ふ故、天下の俳諧一日も安堵の作意をめぐら
さず、かの守武がもてあそびし千句の楽はやくつき、梅翁のこ
のみし句鉢のかるさやがてやみなん事、こゝろある人眉をひそ
め、聞人唇をうごかす。是俳諧に主たる者をたてず、面々の家
をたてんとするよりかゝる事になりぬ。俳門に学士なきがいた
す所、なげくべし。

引用冒頭に言う「此比」とは延宝八年を指示すると見てよからう
が、惟中は『破邪顯正返答』（延宝八年二月刊）においても、同年の
宗因歳旦句「そよやそよ昨日の風鉢一夜の春」に、「世上誹諧風鉢の
かはれるを見給ひて」と付言していた。これが「世上誹風異鉢なる
事を噂たまひ」た席での即吟であることを伝える西吟の回想（元禄
十七年跋「うつぶしぞめ」）をも考え併せれば確かに、時の俳風を異
と見る宗因の感懐が漏れ聞こえてくるかのようである。が、これを
直ちに宗因自身の発言に置き換えて理解するには、いま一步の距離
を保たねばなるまい。これらの諸要素が参考資料とされるに留まら
ず、敢えて宗因の胸中と直結して論じられるのは何故か。さらに、
「今つくばや」句はともかくとして、少なくとも見積もつても半年程前
の作になる「なんにもはや」句をもこれと対になるものと把握し、
俳諧に興味を失つてゆく心境の吐露を見出そうとする根拠は何処に
あるのか。実はここに、宗因伝記にしばしば利用される一資料が介
在する。安永十年初版、谷素外編『梅翁宗因発句集』。同書において
「今つくばや」の一句には、長文の前書が付されていたのであった。

当世の風体、年々日々所くにうつりかはる。新しく珍らし

く、かなはぬ老の耳にだにおもしろくうらやましながら、初
學のいひづれをよしとおもひさだむるかたくなやとおぼえて
今つくばや鎌倉宗鑑が犬ざくら

さてこの詞書、素外は何処で見出したものであろうか。宗因俳諧
発句集としては、素外より先、上田秋成の手になるとされる『むか
し口』（安永六年刊）が行われている。しかしながら、「宗因の発句
集としては、別により完備した一陽井素外の『梅翁発句集』（安永十
年刊）があり、……」（大谷篤蔵氏執筆『日本古典文学大辞典』「む
かし口」項）との見方に代表されるように、従来、信頼度は『梅翁
宗因発句集』の方により重く置かれてきた。句数、『むかし口』百十
三句、『梅翁宗因発句集』二百三十七句。後者は天明元年の再版時に
百二十句を増補し、文化二年版で百七句を追加、文政六年版に至つ
ては校訂と整理を進めた上で、総計五百八十一句の輯録に及んでい
る。数量の点において、素外の仕事は評価されて然るべきかも知れ
ない。但し、資料の信憑性はまた別の問題である。

『むかし口』所収の百十三句は、ただ一句を除いて安永版『梅翁
宗因発句集』にも見出すことができる。除外句は「朝ゆふの人もめ
づらしけふの春」——享保十九年刊『西山三籟集』にも載る連歌発
句であった。加うるに、『むかし口』収録句中、出典不明の十九句に
ついて、『梅翁宗因発句集』初版を検すれば、それらは、詞書・句形
の悉くが『むかし口』に一致する。この一致は、素外が宗因句集を
編むに際して、先行の『むかし口』を下敷きにしたという事実を語
るに十分なものであろう。

問題の一句に戻りたい。『むかし口』に「今つくばや」句は詞書を
持たず、編者の傍注が書き留められている。

今筑波鎌くら宗鑑大ざくら

此句は世上の句鉢のおのがまゝになりゆくを欺きて利口せられし由、續無名抄に見えたり。

素外は「むかし口」に拠り、『続無名抄』の解釈を識つた。『梅翁宗因発句集』編纂の経緯を勘案すれば、そこに見出される先の詞書は、『続無名抄』に就いた素外が、彼なりに宗因に寄り添いつつ宗因に成り代わる意を以て付したものと、見るのが妥当であろう。もう一例挙げる。「句数最も多く、校訂もまた良心的」(大谷氏・前掲書)と評される文政版『梅翁発句集』の、かの有名な一句に付された詞書はどうか。『談林十百韻』には認められない宗因の発言が、素外等の発掘した他資料中の何処かにあったと、想定できるだろうか。

東武に下りし時俳諧の談林とて會する菴あり、其所に招かれ千句巻頭の発句所望にあひて

さればこゝに談林の木あり梅花

迂回を重ねたが、「今つくばや」吟をめぐることは、『梅翁宗因発句集』所収の詞書を宗因自身の言葉と見、その傍証を『続無名抄』の惟中の言葉に求めるのは、素外が踏んだ手続を逆行することに他ならない点を、特に指摘しておく。そうしてまた、当句と「なんにもはや」句を同時期、同じ情況下で詠まれたものと解釈し、△宗因連歌回帰説▽を最初に明記するのもまた、『梅翁宗因発句集』巻頭を飾る、素外の序文なのであった。

當流の始祖梅花翁宗因、俳諧のあやある言葉に其香かくれなく、陽春の色を見せしは寛文延寶の比にや。此翁、はじめは西山豊一とて、時の肥後侯の藩中、八代の加藤正方に属し、文雅につけてもおおばえめでたかりしに、寛永九年大守さることの有ては

からずも武門を遁れ、身を雲水の行方にまかせ、心を花月のなごめにとゞむ。ひとたび伏見に寓居せしうち、湖東の縣に遊び、やどりをかさねしほどに、しるよしの君より、かりにいほりすべき地を望めよの命を蒙り、

爰にせう梅あり山あり河も有

然りし後、又東風に吹誘はれてや、浪速江のあしめに杖を曳きしが、天満の靈社に宿縁やありけむ、正保のはじめ鶯のやどに隣れる住所を得て、爰につらね歌の事をあづかる。いよゝ神ごゝろに叶ひけるに欵、南枝に花の詞をひらき、北窓に雪の力を添て、筑紫瀉しらぬ人なく、吾妻路までとりはやす事になむなりにき。さりや武陽にくだりては俳諧の談林をひらきて世俗の眠りを覺まさせ、花洛に登りては同總本寺を建て末派の商量をはげましめ、年々益盛なりしに、老後鳴瀧の秋風等風義を乱すに及て犬櫻の喩あり、将楊梅の一句に口を閉て世を連歌に終る(後略)。

傍線箇所が、いわゆる△宗因連歌回帰説▽。その吟味は繰り返す要もなからうが、素外が語る「當流の始祖梅花翁宗因」全体像はいかがなものか。『むかし口』巻頭「梅翁伝」は、「翁が俳諧は、只連歌のいとまなるたはぶれ」であって「かの三籟集にかぞへつくせる千々の句を見てこそ、翁が風雅のまことはしるべ」く、「それがあまりの俳諧は、をりくのたはげごとく見」るべきことを主張する。これに比べて素外の伝える宗因像は、俳壇上の自派勢力扶植にいかにも熱心な、談林俳諧創始者に似つかわしいものだが、「武陽にくだりて俳諧の談林をひらきて」などとは実像と遠くかけ離れた誇張であること、今日では最早常識の類に属しよう。けれどもこれも、類

原退蔵氏「西山宗因」(『俳諧史の研究』昭8)、『頼原退蔵著作集』第5巻再録(昭55)が「宗因の句集たる安永六年刊の『俳諧むかし口』、及び天明元年刊(安永十年序)素外編の『梅翁宗因発句集』にはそれ〴〵梅翁の略傳がある。素外は江戸談林七世を繼いで最も祖翁に忠實な人であつたから、その傳は大體信じてよからう」として以来、素外述宗因伝への信用は厚い。「なんにもはや」「今つくばや」句に關する誤認の原因の一つは、この素外序文の無批判な受容に発していると思われるのである。

次なる問題は、連歌への興味を告げる宗因書簡にある。

三

以下は、野間氏編「新編宗因書簡集」(『国語国文』昭29・10、『談林叢談』再録)所収、「天和元年六月某日付、何某宛」書簡の全文である。

我等隠居所、南に四疊敷つけ候て、広くなり、壺の内へ草花を植、氣慰みに成申候。五人十人は客も成候間、別而之者近日会催し候。

連哥 老が来る木陰ならなむ若葉哉 宗因

連歌おもしろく成申候。誹は、当風成まじくおぼえ候。秋風が新しき口ぶり、三吟を見て、我を折候。愚句、古きうへに、鉢いやくし思ひなされ候。

宛先も年次も欠くこの書簡、「天和元年六月」に比定する根拠は、所引「老が来る」句を発句とする次の十一吟百韻と引き比べてのことであつた。第三まで掲げておく。

辛酉六月十四日於宗因隠居

山何

老かくる木陰ならなむ若葉哉

宗因

卯花垣は世の外の宿

宗春

杜鵑在明がたの聲聞て

周南

「辛酉」とは延宝九年、九月改元して天和元年のこと、翌天和二年三月に没するおおよそ半年程も前の、最晩年の書簡、ということに一応の落着を求めてよいであらう。

ところが、その内容があまりにも有名であるためか、所在の確認されずに引用されるきらいのある当書簡、実は現存を聞かない代物なのである。発信は、文化十一年刊・素外隨筆「玉池雜藻」、巻一的一条。¹⁰⁾

宗因手紙の切レに、我等隠居所南に四疊敷つけ候て広くなり、壺の内へ草花を植、氣慰みに成申候。五人十人は客も成候間、別而之者近日会催し候。

連哥 老が来る木陰ならなむ若葉哉 宗因

連歌おもしろく成申候。誹は当風成まじくおぼえ候。秋風が新しき口ぶり、三吟を見て、我を折候。愚句古きうへに鉢いやくし思ひなされ候。

さてこれで、先引の「梅翁宗因発句集」序文傍線部、「老後鳴瀧の秋風等風義を乱すに及で犬櫻の喩あり、将楊梅の一句に口を閉て世を連歌に終る」との一節も判然とする。素外が唱えるところは、当の「宗因手紙の切レ」発見を間においてはじめて、合理的な説明が可能となるものであつたわけである。ここに誤解が生じやすい。例えば、雲英末雄氏「俳諧隠者三井秋風」(『元禄京都俳壇研究』、昭60)は、宗因の秋風觀を次のように説明する。¹¹⁾

……（註・秋風の俳諧は）延宝末年から談林の宗因や常矩に接することにより、著しい変化がみられ、その奔放な俳風にとどまるところを知らず、はては天和元年初夏のころ伊勢内宮の長官氏富に宛てた宗因の書簡には「俳は当風成まじくおぼえ候。秋風が新しい口ぶり、三吟を見て我を折候。愚句古きうへに鉢いやくしいひなされ候」とまで誌されている。同様の文辞は『梅翁宗因発句集』（安永十年序）の素外の序にも「武陽にくだりては俳諧の談林をひらきて世俗の眠りを覚させ、花洛に登りては同総本寺を建て末派の商業をはげましめ、年々盛なりしを老後鳴滝の秋風等風義を乱すに及で、犬桜の吟あり、将楊梅の一句に口を閉て世を連歌に終る」とあつて確証を得る。

氏の引く書簡と素外の序文はそもそもの一對のものとするべきで、一方が他方の傍証となるような関係にはないのだが、△宗因連歌回帰説△はかくのごとく、素外の資料提供の上にあることを逸して行われてきたのであつた。

誤解を招かぬよう、若干の注意を促しておきたい。本稿の趣旨は、当の書簡を素外の捏造などと言ひ立てるにあるのではなく、ひとえに、素外の敷いた枠組みをそのままに受け容れて、素外から宗因伝を出発させることの危うさを主張することにある。素外係わるころの宗因伝をひとまず留保しておくことにすれば、△宗因連歌回帰説△をめぐる情況は様変わりしてこよう。

四

晩年の宗因の活動は、ではどのようなものであつたのか。私に作成している宗因年譜から、「なんにもはや」独吟百韻が賦された延宝

七年を一応の目安とし、出座を中心とした以降の動向を外観する（◆〓俳諧作品、◇〓連歌作品を表す）。

延宝七年（75歳）

◆春、肥前佐賀衆朋之歡迎の「何袋」俳諧百韻興行（延宝七年十二月序『わたし船』）。

◆四月頃、於向栄庵、西国と俳諧唱和（同四月刊『見花数寄』）。

◆五月上旬、如見興行「梅酒十歌仙」に一座（同十一月序「梅酒十歌仙」）。

◇五月十五日松坂下向、定之興行「賦何人」百韻に一座（柿衛文庫蔵宗因自筆「賦何人連歌百韻懷紙」）。

◇六月二十六日、伊勢外宮長官満彦興行連歌座に出仕（氏富卿日記「延宝七年之記」）。

◆夏、「なんにもはや」独吟百韻（延宝八年八月跋「阿蘭陀丸二番船」・同九月刊「通し馬」）。

◇夏、伊勢滞在、中、「賦山何連歌」世吉に出座（神宮文庫蔵懷紙）。

◇七月二十五―二十七日、「氏富家千句」に奉仕（柿衛文庫蔵宗因自筆「伊勢内宮長官氏富家千句」他）。

◆秋、萩衆昌次歡迎「何櫛」百韻に一座（『わたし船』）。

◆十一月七日、於大坂堂島松門亭、似春歡迎「伊勢何」百韻に一座（『わたし船』）。

◆十一月、似春・四友と三吟千句興行（延宝八年六月刊『山の端千句』）。

延宝八年（76歳）

◆歳旦発句「としたけて也けりく春に又」「そややそよ昨日の風

鉢一夜の春（延宝八年二月刊『破邪顯正返答』）。

◆春、「今筑波や」独吟百韻（『阿蘭陀丸二番船』）。

◆春、幽山の求めに応じ、「歌仙俳諧寄名所」を独吟（延宝八年序『誹枕』・同閏八月刊『各盡』）。

◆春、梅朝送別の両吟歌仙（『通し馬』）。

◆五月七日、於生玉社西鶴興行矢数俳諧巻頭「何泰平」百韻に第三を贈り、西鶴を「日本第一前代之俳諧の性」と推奨する（延宝九年四月刊『西鶴大矢数』・同八年六月二十日付西鶴書簡）。

◆九月二十日、夢想独吟連歌四十八句（多賀社文書蔵写本『西山宗因夢想』）。

◆歳暮吟、「こし方はのどかにてはやし年の暮」「月雪の故やはおしむとしのくれ」（『氏富卿日記』延宝九年之記）。

延宝九（天和元）年（77歳）

◆歳旦吟「雪をうけて袂ゆたけし民の春」「我年やこれにぞよれるかどの松」（『宗因発句帳』・『氏富卿日記』延宝九年之記）。

◆歳旦発句「心友あり初陽うるほふ今此花」「年玉は庭やござゝにふるじやまで」（『氏富卿日記』延宝九年之記）。

◆六月十四日、於宗因隠居所、「老かくる」十一吟百韻（綿屋文庫蔵写本『連歌集宗因太神宮法案等』）。

◆八月二十四日、惟中等と讃岐興昌寺に宗鑑旧跡一夜庵建立百韻を勧進（延宝九年九月刊『一夜庵建立縁起』）。

◆秋、仁和寺辺逍遙、独吟「歌仙之誹諧」（綿屋文庫蔵宗因自筆懷紙『誹諧歌仙』）。

◆十一月、山莊に冬簀、梅朝を相手に俳席あり（田村専一郎氏旧蔵天和元年十一月二十一日付宗因書簡）。

天和二年（78歳）

◆春、於大和郡山、歳旦吟「たのしてふ世の春をみん三笠山」（『宗因発句帳』）。

延宝八・九年にかかる俳諧倦怠を前提にして、西鶴大矢数成功への褒詞には、惟中発企の一夜庵再興への賛助には、且つは天和元年秋独吟俳諧歌仙の存在には、一体どのような解釈が与えられようか。右の流れを追う限りにおいて浮かび上がるのは、連俳いずれかへの傾倒ではなく、ある時には連歌を、ある時には俳諧をと詠み分けている宗因の二面性であろう。そしてその姿勢は早く、明暦二年に向榮庵という定居を得て以来ここに至るまで、一貫してとり続けられたものでもあった¹²⁾。

再度注意を促しておけば、上に見るとき出座資料から帰納される宗因の連俳活動と、俳書入集句の二つ、またさまざまな人々のさまざまな記録を検討して想定される当時の俳壇が迎えていた局面とは、また別の次元の問題である。宗因の思惑がその周囲に少なからぬ影響を与えたことは確かであろうし、宗因もまた彼を取り巻く環境に左右されて動くこともあったには違いない。だが、そのような心境の模索は、確実な資料を積み重ね上げた結果にもたらされるはずのものではあるまいか。晩年の連歌回帰への疑問を糸口として、いまはただ、伝記資料への距離のとり方の問題を提起しておく。

註

(1)

前掲二氏他、古典俳文学大系『談林俳諧集二』『阿蘭陀丸二番船』補注(飯田正一氏担当)も当独吟を「延宝八年作」とし、世上の放埒な俳風を歎じて、老人には無用のわざとしたものとする。『通し馬』下冊所収の当該歌仙は(酒竹文庫本『酒2487』)に拠る、なんにもはや楊梅の実むかし口 梅翁

我にもかびた紫蘇もりて 江雲

さまれ水小皿の雪雨もりて 梅朝

以下の両吟。なお、野間氏は「誹諧解脫抄」を引きつつ、東下の梅朝が在色に届けた宗因の書札に、「なんにもはや」句が書き付けられていたと推定する(『西鶴年譜考証』山頁、昭27)。しかし、当該箇所には、

……門弟梅朝、東府へ下りしに、小札を調へ、誹の事も老衰益なきなど書て、猶々書に、明和和郎山へまかる。古き都の花見など書送られしを、形見とおもひ予表具して、今以所持す。

とあるばかりであり(『野口在色遺稿』第1巻、昭7年)、『解脫抄』全編を通じて当句の記載は見当たらない。『阿蘭陀丸二番船』刊行より早く、江戸の地まで宗因の独吟がもたらされたことに確証が得られない以上、「なんにもはや」百韻の成立は、梅朝東下の延宝八年春以前に求められなければならないだろう。

(2) 引用は、古典俳文学大系第4巻『談林俳諧集二』(昭47)に拠る。以下も同。

(3) 近世文学資料類従古俳諧編第47巻の影印(昭51)に拠り、適宜私に句読点を施した。

(4) 有朋堂文庫『名家発句集』(大3)に天明元年版の翻刻があるが、以下専ら、初版『梅翁宗因発句集』と『むかし口』との関係に焦点を絞って論じる都合上、綿屋文庫所蔵の安永十年版・半紙本一冊(わ170・11)に拠り、私に句読点を付して引用する。但し、素外序並びに引用句については、両版間に異同はない。

(5) 半紙本一冊、大坂野村長兵衛他二軒板。寛政十二年菊舎太兵衛板の改題本『宗因俳諧発句集』も存するが、ここでは、綿屋文庫蔵(わ165・23)の安永六年九月刊本に拠る。なお、二種の宗因句集、『むかし口』『梅翁宗因発句集』が時を隔てずして編纂された経緯については、別に詳しく論じる予定である。

(6) 但し、文政版『梅翁発句集』はさらに、『むかし口』から採ったと思しき句「人なみの輪をもこえけり御萩川」をも削除している。当句も「三

韻集」所載の連歌発句。

(7) 文政六年春序『梅翁発句集』は中本二冊、谷素庵編。酒竹文庫蔵本

『酒2971』に拠った。

(8) 野間氏『談林俳諧史の第一頁』(『国語国文』昭27・10)、『談林叢談』再録、昭61)参照。

(9) 綿屋文庫蔵『連歌集宗因太神宮法家等』(「れ4・2・18」)所収。写本、横本一冊。夙に浅田善二郎氏(西山宗因の連歌拾遺)、『国語国文』昭12・1)に、一巡と宗因付句の紹介がある。

(10) 日本俳書大系第29巻『近世俳話句集上』(普及版、昭5)より引用。

(11) 引用中、「伊勢内宮の長官氏富に宛てた」とするのは、『新編宗因書簡集』が当該書簡の直前に掲げる、延宝九年正月二十一日付の荒木田氏富宛書簡との混同であろう。

(12) 拙稿『宗因説連歌伝書「登母之火集」の背景——宗因像受容の側面として』(島津忠夫先生古稀記念論集『日本文学史論』所収、平9)においては、延宝初年の東下時にも、宗因を連歌師として受容する層の存したことを指摘した。

「付記」資料掲載の許可を賜った財団法人柿衛文庫に、末筆ながら深謝申し上げます。

——本学大学院博士後期課程——